

日本史 A, 日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

2年目の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）となる。

全科目共通の問題作成方針に加えて、日本史の問題作成方針には、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第1問 発表に向けて話し合いを行う高校生2人の鉱物資源の開発と利用に関する会話から、明治時代から1980年代までの時期に関わる問いが出題された。問いは、政治史、社会経済史、外交史に関する小問で構成され、回報と文献史料を用いた問いがみられた。

問1 会話文中の空欄に適する語句の組合せを選択する問題。一方は「足尾銅山」「払い下げ」といった会話文中のキーワードから解を導くものであった。もう一方は会話文の主旨に沿って適切な語句を選択する問題で、読解力とともに適語を選択する考察力が求められた。

問2 正文の組み合わせを選択する問題。「富岡製糸場」「工部省」についての正確な理解、「払い下げ」「開拓使官有物払下げ事件」の影響についての正確な理解が問われた。

問3 1930年代後半以降の日本の鉱物資源利用に関する3文の整序問題。日中戦争から第二次世界大戦敗戦に至る流れを正確に理解できているかが問われた問題であった。

問4 1930年代後半のものと思われる史料の内容を読み取り、正文を判断する問題。受験者にとっては初見と思われる史料である。史料を丁寧に読み解く力が求められた。

問5 会話文中の空欄に適する語句の組合せを選択する問題。一方は「池田隼人内閣」というキーワードから解を導くものであった。もう一方は、会話文の主旨に沿って適切な法令中の文言を選択する問題で、会話文から考察する力とともに史資料の読解力が求められた。

問6 1970～1980年代の日本の輸出入に関する2文の正誤を判断する問題。「工場の自動化」と「第一次石油危機」がもたらした影響について正確な理解があるかどうか問われた。

問7 第二次世界大戦後の日本と周辺諸国の関係に関する4文から2つの正文を判断する問題。日本と周辺諸国との関係の有り様、条約締結の対象国とその内容、条約締結の影響が問われ、戦後の日本と周辺諸国の対外関係について包括的で正確な理解が求められた。

第2問 幕末維新期についての高校生2人の会話から、幕末から明治時代までの時期に関わる問いが出題された。問いは、政治史、社会経済史、外交史、文化史、教育史に関する小問で構成され、文献史料を用いた問いがみられた。

問1 明治期の事柄や人物を示す2文から、それらが示す事柄や人物を選択する問題。人名と

その人物を示すキーワードの結びつきが問われ、歴史上の人物の正確な理解が求められた。

問2 幕末から明治期までの日本の貿易に関する3文の整序問題。条約名や法令名などの具体的な歴史用語はなく、内容から用語を想起し、並び替える必要があった。幕末から明治期にかけての外交史、経済史の流れを正確に理解できているかが問われる問題であった。

問3 史料として提示された「船中八策」とメモの内容を読み取り、2文の正誤を判断する問題。メモを論理的に読み解く力と「政体書」についての正確な理解が求められた。

問4 明治期の文学に関する4文から、正文を判断する問題。文学史上の主義と時期の相関、文学者や著作物の歴史上の意義が問われ、明治期の文学について包括的で正確な理解が求められた。

第3問 講義受講後の高校生2人の会話から、一部、大正時代にかかる問題や昭和時代にかかる語句もみられたが、明治時代を中心にした問いが出題された。問いは、社会経済史、外交史に関する小問で構成され、文献史料、調査結果の表を用いた問いがみられた。

問1 提示されたプリントの内容を読み取り、2文の正誤を判断する問題。プリントに含まれる史料を丁寧に読み解く力と、西暦を和暦に読み替える史資料読解の力が求められた。

問2 会話文中の空欄に適する人名の組合せを選択する問題。人物を示すキーワードから解を導くもので、歴史上の人物の正確な理解が求められた。

問3 伊藤博文を中心にした日朝関係に関する3文の整序問題。戦争名や条約名、機関名などの具体的な歴史用語はなく、内容から用語を想起し、並び替える必要があった。天津条約から韓国併合に至る流れを正確に理解できているかが問われる問題であった。

問4 明治期の会社に関する4文から、正文を判断する問題。「大阪貿易会社」「日本郵船会社」「東洋拓殖会社」「企業勃興」などの文中の語句について正確な理解が求められた。

問5 条約改正に関する4文から、誤文を判断する問題。プリントの記述から問われている期間を割り出す論理的な読解力と、条約改正交渉の流れの正確な理解が求められた。

問6(1) プリントの記述をヒントにしながら1922年の『職業婦人に関する調査』をまとめた表から内容を読み取り、2文の正誤を判断する問題。表を読み解く分析力と読み取った内容が問題文の内容と一致するかどうかを考察する力が求められた。

問6(2) 提示された2つの主題に沿う内容の史料をそれぞれ選択する問題。「独立自立の抑え難き欲求の発言」「女子挺身隊」「打てる」「通話者」といった主題に沿うかどうかの手掛かりとなるキーワードの把握を含め史料を読み解く力と論理的な考察力が求められた。

第4問 授業における高校生3人の発表から、一部、明治時代にかかる語句もみられたが、大正時代から21世紀に至る時期を中心にした問いが出題された。問いは、政治史、外交史、文化史、教育史に関する小問で構成され、文献史料を用いた問いがみられた。

問1 吉野作造が書いた史料から内容を読み取り、2文の正誤を判断する問題。受験者にとっては初見と思われる史料である。読解力を求める問いであったが、「第五項」など、史料中の歴史用語に問いが及んでいないため、読み取りは比較的容易であった。

問2 文学史に関する4文から、1910～1920年代のものを判断する問題。「キング」「野間宏」「火野葦平」「正岡子規」などの文中の語句について正確な理解が求められた。

問3 1941年中の日本の動向に関する3文の整序問題。3文とも同年中の事柄であり、太平洋戦争開戦に至る日本の動向を正確に理解できているかが問われた問題であった。

問4 提示された2つの文が示す宣言と会談が行われた場所を地図上の位置でそれぞれ選択する問題。歴史的事象に対し地理的理解も同時に行われているかが問われた問題であった。

問5 発表中の空欄に適する語句を選択する問題。「日ソ共同宣言」の内容、影響が問われ、

対ソ関係や国際的立場など、当時の日本の状況について多面的な理解が求められた。

問6 文化史に関する4文から、占領期のものを判断する問題。「湯川秀樹」「大江健三郎」「宮崎駿」「黒澤（黒沢）明」などの文中の語句について正確な理解が求められた。

問7 近現代の日本と世界のつながりに関する4文から誤文を判断する問題。時期の異なる4つの事柄について、事柄の後先、事柄の内容、事柄の影響が問われた。4文の時期と視点が大きく異なるため、近現代の日本と世界のつながりについて包括的で正確な理解が求められた。

第5問 高校生3人の発表に向けてのメモから、明治時代から1990年代までの時期に関わる問いが出題された。問いは、政治史、社会経済史、外交史、文化史、教育史に関する小問で構成され、写真、自伝を資料として用いた問いがみられた。

問1 写真から読み取れる事柄から、2文の正誤を判断する問題。写真に写る服装や垂れ幕に書かれた文字に注目し、写真を分析する力が求められた。

問2 文化史に関する4文から、大正時代のを判断する問題。「トーキー（有声映画）」「日本文学報国会」「新劇」「テレビ」「ラジオ」など文中の語句について正確な理解が問われた。

問3 日本と世界の出来事に関する4文から、1950～1976年に起こっていないものを判断する問題。冷戦構造の中で起こった事柄の時期について正確な理解が問われた。

問4 資料として示された竹宮恵子の自伝の内容を読み取り、正文を判断する問題。史料を丁寧に読み解く力と安保闘争・学園紛争の時期についての正確な理解が求められた。

問5 会話文中の空欄に適する語句の組合せを選択する問題。書名や人名を特定するキーワードから解を導くもので、歴史上の人物の正確な理解が求められた。

問6 日本社会党に関する4文から正文を判断する問題。日本社会党について、1947年当時の党首と1955年における動向が問われ、55年体制の確立に至るまでの社会党について正確な理解が求められた。

問7 近現代の女性に関わる法令の制定時期の整序問題。法令名は示されておらず、内容から法令名を想起し、並び替える必要があった。明治期から現代までに徐々に女性の権利が保障されるようになった流れを法令とともに理解できているかが問われた問題であった。

【総合所見】

内容については、学習指導要領の目標に則しての出題であった。

昨年度に引き続き、史資料を用いて読解力や分析力、考察力を問う姿勢が強く示された。提示された史資料は、選択肢として扱われた史資料・地図を除くと3種8点であった。提示された史資料は興味深いものが多く、**2**で扱われた回報は、身近なものも史料となり得ることを示すと同時に、現在のリサイクルのような概念がすでに過去にあったというおどろきを感じさせてくれた。**10**で扱われた「船中八策」は、後世の創作であるという見解もある史料である。しかし、あえてこの史料を用いることによって、歴史学の基礎である史料批判の重要性を示すと同時に、史料を吟味することによってより増す歴史学のおもしろさを伝えてくれた。西暦と和暦を読み替える力が**12**では問われたが、これは史資料読解の基本的な力である。

提示された史資料の点数は昨年度第2日程日本史Aよりも減少したが、一方で正確な理解や考察力を求める問題は増加し、理解の質や考察力がより細やかに量られるようになった。なお、求められた理解は、人物や組織、法令・条約、もの、事柄などを、時期、場所、他の事柄と関連付けながら正確に理解するというもので、基礎的な理解の範囲を超えないものであった。考察力は、**2**・**6**・**7**・**23**・**25**のような、基礎的理解をもとにして事柄の結果や影響を考察する問いによって量られた。また、**23**・**31**では、示された事柄についての多面的な理解が、

7・25では、特定のテーマについての包括的な理解が求められ、受験者の理解の深さが量られた。

範囲については、第1問で明治時代から1980年代までの時期、第2問で幕末から明治時代までの時期、第3問で明治時代を中心にした時期、第4問で大正時代から21世紀に至る時期、第5問で明治時代から1990年代までの時期が扱われた。55年体制崩壊以降の事項も3点あるなど、全体として幕末から現代までバランス良く出題された。分野別にみても、政治史、社会経済史、外交史、文化史、教育史それぞれに関わる問いがバランスよく出題されていた。

3 分量・程度

60分の試験時間に対して、問題数は大問が5題、小問が32題であった。比較的解答に時間がかかりやすい傾向にあるリード文と関連させて解を導く問いが、昨年に引き続き出題されたが、史資料の読解問題が減少したことを考えると分量は適切であったといえる。

問題は、基本的事項の正確な理解や基礎的な力を問う問題が主体であり、程度は適切であった。しかし、一方で、新渡戸稲造が国際連盟の事務局長であったことなど、受験者にとってやや細やかと思われる内容が問われた設問もみられた(13)。史資料については、受験者にとって初見と思われるものが複数あったが、難解なものはなく、また、脚注が丁寧に付され、読むことで正確な判断ができるよう配慮されており、複雑な問いもなかった。このような配慮については、今後も継続していただくことを強く希望したい。

4 表現・形式

全体を通して受験者にとって難解な表現はみられなかった。選択肢の文も簡潔に記述され、受験者が正確な判断ができるよう配慮されていた。ただし、14については、3文とも同年中の事柄であるので、問題文に「同年中の事柄である」という記載があればさらに取り組みやすかった。また、史資料の提示を含めたリード文・問題文は、レイアウトが工夫され、明確であった。

形式については、昨年度の共通テストにあったような歴史的評価から根拠を選択する形式、事例から歴史的評価を選択する形式、語句から理由を選択する形式はみられなくなり、理解や考察力を問うための形式が多様になった。また、読解力や考察力を問うために、本文の趣旨に沿うキーワードを問う形式の出題もなされた(1)。今年度、整序を求める問題は5題出題された。これらの問題の中には時期的な間隔が狭いものもあったが、テーマとなっている事柄を把握し、歴史的な変遷に意識を向けて考察できれば解を導き出せるよう、いずれも工夫されていた。また、整序問題の中で出題された、複数の分野にまたがる事項を扱う形式の問い(9)、明確な歴史用語が使用されず、事柄から語句を想起し、年代を比定する形式の問い(9・14・32)は、受験者の知識の理解の質を量る良い形式であった。史資料を用いた問いでは、読み取りだけでなく、史資料に関連する歴史的語句の理解を問う形式の問題(10・29)も出題されたが、とりわけ、5のような、史資料の文言を選択肢として解答させる形式は、史資料の主旨を読み解く力と、問題文の趣旨に沿った史資料を選択する力を量る良い形式であった。また、写真からの読み取りを問うた26は、写真に写る人物からだけでなく垂れ幕からも情報を得る必要があり、写真資料の情報量の多さを改めて感じさせてくれる良問であった。

5 まとめ(総括的な評価)

2年目を迎えた大学入学共通テストは、全体的に、基本的事項の正確な理解や思考力、判断力、表現力等を問うものであり、受験者の培ってきた力や理解を評価するのにふさわしいテストであっ

た。また、今度のテストは、基本的事項の理解の上に高度な考察が成り立つことを高等学校における日本史学習に示し、高等学校の授業にその実践を求めるものでもあった。なお、今回の大学入学共通テストでは、第1問で環境問題という地球規模の課題意識から歴史の考察が試みられた一方で、第2問、第3問、第5問では、坂本龍馬、新五千円札に描かれることになる津田梅子、舞台女優、漫画家がとりあげられ、身近な視点から歴史の考察が行われた。このことは、これからの時代、多様な立場から、多様な視点で歴史が考察されるであろうことを示唆している。生徒を目の前にして指導を行う我々は、今後、正に多様性に対する備えを行わなければならないではないだろうか。

日 本 史 B

1 前 文

2年目の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）となる。全科目共通の問題作成方針に加えて、日本史の問題作成方針には、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第1問 日本史上における武人や兵士などに関する高校生の会話から、原始～近代の諸分野について出題がなされている。遺物のデータや文字史料を用いた問いなどがみられた。

問1 原始・古代の遺構および近世の方広寺に関する知識を問う問題。前者については時代の相違から比較的容易に判断ができる。後者の正解である「鐘銘の表記」については、難解ではないものの、少ない問題数のなかで問う知識としてはやや些末に感じた。

問2 考古資料から得られた情報からどのように原始社会の様相が復元されるかということについて、資料の性格とその分析方法の組合せを考察させる問題。資料と歴史叙述の関係性という歴史学の根本的理解について問う意欲的な出題として評価したい。ただし、遺物に関する情報の「メモ」を踏まえなくても解答できる点がやや残念に感じた。

問3 平安時代後期の寺院社会についての文献史料から、史料の読解および知識・理解を問う問題。史料を丁寧に読み取る能力と、知識にもとづいてYの文章を院政期と判断する力、それが何世紀にあたるかという基本的な年代観が問われる。

問4 近世前期における「名君」の学問奨励に関わる事績についての知識を問う問題。比較的易しい問題ではあるが、用語(人物とその事績・書籍)についての正確な知識が求められる。

問5 「武士身分を廃止した影響」として、四民平等と征韓論それぞれの歴史的意義について問う。前者については、「農民も戦死する可能性を生じさせた」という意外な切り口から問うことで、学習で得た知識を多面的に考察させることに成功している。

問6 明治時代における徴兵制の施行について、史料読解と知識を問う問題。丁寧な史料の読み取りと、徴兵制に関わる基本的な知識が問われている。やや難解な史料であるが、徴兵制などについての知識と関連づけながら読むことで判断することができる。

第2問 古代における粟と麦についての調べ学習の成果発表という場面設定を通じて、原始・古代の諸分野について問う問題。社会・経済史を中心とした小問で構成され、表や史資料の読解なども出題された。

問1 原始～古代の農耕の様相や貢租についての知識を問う問題。各時代の社会像についての正確な知識・理解が問われる。

問2 高校生から出た2つの問いの解答にせまるための史料を選択する問題。発表要旨や学習した知識(「義倉」など)を踏まえて史料を読解することが求められるが、それぞれの組合せの誤答が比較的明確に誤答とみなせる内容だったこともあり平易な問題であった。

- 問3 小麦の納入が指定された国々と、それらの国々の調の品目の一覧表を用いた問題。畿内の範囲という基礎的知識を踏まえた上で、2つの表を比較・分析する能力が求められる。
- 問4 古代の土地制度についての年代整序問題。部民制(Ⅰ)、初期荘園(Ⅱ)、寄進地系荘園(Ⅲ)という3つの事項があがるが、特にⅡ・Ⅲについては一問一答的な用語の暗記ではなく、それぞれの時代の土地制度の特徴を理解できているかどうかを問う良問。
- 問5 古代の雑穀栽培について述べた文の正しい組合せを選ぶ問題。発表要旨を正確に読み取る力と、それが選択肢の内容に合致するかどうか論理的に考察する力が求められる。
- 第3問 中世の法制度や法慣習についての高校生2人の会話文という形式を通じて、中世の法制史、社会史、文化史、産業史などの諸分野について問う問題。
- 問1 鎌倉時代の政治史・法制史について、単純に基本的な人名・語句の知識を問う問題。
- 問2 鎌倉幕府による飢饉への対応について史料読解の能力を問う問題。飢饉の際は人身売買が救命につながったという中世社会の実態を読み取らせるなど、現代的な価値観や先入観を排除して史料に向き合うことが求められる良問。
- 問3 中世の法や制度運用に関する文の年代順を問う問題。選択肢の文同士の因果関係やテーマの一貫性はなく、「繪旨」、「異国警固番役」、「一条兼良」といったキーワードから、比較的単純に年代の順序を判断する。
- 問4 史料の読み取りを通じて惣村の実態や関連用語の理解について問う。史料を丁寧に読み取った上で、学習事項の知識・理解と関連付けて考察することが求められる良問。
- 問5 鎌倉時代の文化史(方丈記)および産業史(大唐米)についての用語を問うている。
- 第4問 近世における戦乱や災害について、高校生が問いを立てて調べ学習を行うという場面設定を通じて、近世の諸分野について問う問題。
- 問1 江戸時代の国内・国外戦争について思考力、判断力、表現力等を問う問題。泰平の時代という江戸時代の根幹的な理解を踏まえつつも、初期や幕末における例外的事例を想起することが求められる。
- 問2 明暦の大火が発生した時期の政策を選択させる問題。当該時期が文治政治への転換期であるという根本的な時代観と、文治政治の政策を判断する知識・理解が求められる。
- 問3 宝永の富士山噴火を題材に史料読解の能力を問う問題。2つの性格の異なる史料から、幕府による政策とその実態について読み取る。丁寧な史料の読み取りが求められる。
- 問4 外国人が関わる江戸時代の出来事についての文の正誤を判断する問題。幕末においても外国公使を殺害するような攘夷事件は起こっていないということで②を誤文と判断することとなるが、そのような事実の有無を知識として判断させることは難しいように感じた。
- 問5 人名と事績を手掛かりに、江戸時代の農業に関する3つの文章の年代順を判断する問題。産業史や社会経済史の年代的把握が適切にできているかが問われる。Ⅲの宮崎安貞の活動年代を意識した学習はあまりしないと思われ、Ⅲの位置の判断が難しかったと推察される。
- 第5問 幕末・維新期の人物史をテーマとする出題。政治・制度史、外交、文化・社会史などの諸分野について横断的な出題がみられた。
- 問1 明治初期における人物とその事績についての知識を問う問題。人物・出来事などの基本的な学習事項が身につけているかが問われる。
- 問2 幕末から明治期までの貿易や条約に関する文の年代順を問う問題。それぞれの内容的な因果関係や年代判断の手掛かりは比較的明確であったと思われる。
- 問3 いわゆる坂本龍馬の「船中八策」について、史料をめぐる諸情報から思考力、判断力、表現力等を問う問題。歴史史料に対する史料批判を迫体験させる意欲的な出題であった。た

だし、史料読解を求める選択肢Xが実際には知識のみで解けるものとなっている点が残念に感じた。

問4 明治の文学に関する文章の正誤問題。当該分野に関する諸事項を政治・社会的背景と結びつけながら正確に理解できているかが問われた。④の『国民新聞』はやや細かい知識か。

第6問 近・現代における日本と世界との関係についての高校生の発表という形式の出題。対外関係や世界情勢、文化史などを中心に小問が構成され、史料や地図を用いた出題もみられた。

問1 吉野作造の二十一か条要求に対する認識について史料から読み取る問題。特に背景的な知識等と結びつける必要はなく、かなり容易に読み取ることが可能であることから、単純な文章の読解問題となってしまう印象を受けた。

問2 近代の文学史についての知識を問う問題。人物と作品といった文学史に関する基礎的な事項と時代観が的確に身につけているかが問われる。

問3 同じ年(1941年)に起こった事象の整序を問う新しい傾向の問題。対米関係だけではなく、独・ソ関係の推移も踏まえて、太平洋戦争に至るまでの事象の前後関係を判断する難問。単純な年代暗記ではなく、因果関係を問うことを重視した出題として評価したいが、全て同年であることを明記して出題意図を明確化すれば思考しやすかったように感じた。

問4 終戦に至る過程における会談・宣言の内容からそれが行われた場所を判断し、地図上から選ぶ問題。地理認識も含めた事象に対する立体的な知識・理解を問う。ただし、限られた設問数のなかで、日本史の問題としてヨーロッパの地図を出題することに疑問も感じた。

問5 日ソ共同宣言の歴史的意義について述べた文章を選ぶ問題。当時の世界情勢を踏まえた上で宣言の歴史的意義を理解できているかが問われる。

問6 占領期の文化についての知識問題。宮崎駿の名が挙がるc・dの選択肢がかなり容易に判断でき、実質的に湯川秀樹と大江健三郎の時期を判断する二択となっているように感じた。

問7 近現代における対外関係についての文章の正誤を判断する問題。挙げられている各時期の出来事やその出来事をめぐる国際関係についての正確な理解が問われる。

3 分量・程度

(1) 分量

昨年と同様、問題数は大問6題、小問32題であった。そのなかで政治史、法制史、社会・経済史、文化史、外交史といった諸分野が横断的かつバランスよく出題されていた。ただし、文化史は、後述する図版の少なさも相まって文学史に偏重していた印象を受けた。32題のうち、初見のものが大半をしめる史資料からの読み取りや考察、大問全体からの考察が求められる問題は延べ11題出題されており、丁寧に問題文と向き合わなければならない構成となっている。読む分量は多いものの、試験時間(60分)と問題数に鑑みればおおむね適切な分量と評価できる。

(2) 程度

程度については、知識・理解と思考力、判断力、表現力等に分けて述べる。まず、知識・理解については、昨年同様、基礎的な学習事項について、単純な用語の暗記ではなく、用語の意味や意義、背景などを正確に理解できているか、諸事象についての知識を整理して身につけられているか、などといった「知識の理解の質」を問う問題が主体であった。特に今年は、時代像や年代観、因果関係など、歴史を大きな枠組みや流れで理解できているかを問う問題が随所にみられた。院政期の年代観を問う[3]や、同年の事象の順序を問う[28]などはその象徴といえる。一部でやや細かい知識を問う問題もみられたが、学習指導要領を逸脱する内容の問題はなかった。知識の理解の質を問う問題から用語の空欄補充のような単純な問題まで、難易度のバランスに配慮され

た構成だった。

思考力、判断力、表現力等を問う問題については、史資料を用いた問題が全体の1/3を占めていたことが特筆される。やや難解な史料もみられたが、いずれも丁寧に読み込んだり、知識・理解と関連づけたりすることで考察が可能となっており、極端に高度な読解や分析が求められる問題はなかった。また、新たな傾向として、学習を通じて得た知識・理解を多面的・多角的に捉え直す問題や、史資料の性格を題材とした問題などが随所にみられた。いずれも高等学校における学習を通じて得た知識・理解や歴史的思考力を活用することで十分に対応できる内容だった。

以上のことから、大学入学相当の学力を測る試験としては適正な程度であったと評価したい。

4 表現・形式

(1) 表現

全体を通じて特に難解な表現はみられなかった。選択肢についてもおおむね簡潔に述べられている。ただし、思考力、判断力、表現力等を問うという意図から抽象的な表現を用いる出題が見られた。このこと自体を否定するものではないが、一部で定義が曖昧に感じる表現もあった(17など)。

(2) 形式

昨年度同様、調べ学習や成果発表など学習の具体的な場面を想定した形式の出題がみられた。受験者は様々な形で史資料と向き合い、読解することが求められる構成となっており、思考力、判断力、表現力等を重視する新学習指導要領の指針に叶った形式であったといえる。選択肢については、組合せの形式が32問中18問出題されていた。限られた問題数で分野や内容を網羅的・横断的に問うために組合せが多くなることは理解できるが、一方の組合せの誤答が明確すぎると実質的に二択となってしまいうため、さらなる工夫も必要だろう。読み取りと知識・理解を同一の小問で問う際は、その選択肢でいずれを問うているのか明確化する工夫がみられ、昨年度よりも判断しやすくなっていた。文献史料にもとづく出題が増えた反面、図版や地図が各1点ずつの出題にとどまった。図像を用いた問題や、地理認識を問う問題がもう少し出題されても良かったように思う。

5 まとめ(総括的な評価)

今年度の共通テストは、知識・理解と思考力、判断力、表現力等という2つの領域を組合せながらバランスよく問うことに配慮がなされた問題であった。特に今年度は史資料から情報を読み取る能力、読み取った情報をもとに考察する能力を問う問題が多数出題されたことが特徴的だったが、史料読解の技能や思考力、判断力、表現力等と、知識・理解を切り分けるのではなく、学習を通じて得た知識・理解と関連づけたり、歴史的な見方・考え方をはたらかせたりしながら読み取りや考察をすることが求められる問題が多く見られた。この点は、読み取りだけで終わらない作問をお願いしたいという昨年度に出されていた要望に応えていただいたものと捉えたい。

史資料から如何にして過去の事実が復元されるか、過去の事実をどのように評価・解釈するのかといった歴史という学問の根本的な営みに迫る出題が多く見られたことも好印象を受けた。例えば、考古資料の性格と分析方法を問う2、既知の歴史事象を新たな視点から解釈する5、現代的価値観や先入観を排除した史料読解を求める13、複数の史資料をつきあわせて考察することで歴史の実像や史料の真偽にせまる19・24などが、その傾向を象徴する問題であった。

ただし、丁寧な注が付されているとはいえ、文献史料の読解が苦手な受験者は負担に感じたことも推察される。史料原文にもとづいて読解・解釈すること自体は重要であり、基本姿勢として継続

していただきたいが、今回のように出題数が多くなると、古語で書かれた文章を現代語訳する能力という、高等学校の日本史学習で求める資質・能力とは異なる要素によって試験結果に差が出てしまうようにも感じた。限られた試験時間を踏まえても、今後は、歴史的思考力を測ることが可能なのであれば、現代語訳を用いるなどの工夫が適宜なされてもよいのではないだろうか。この点については、史料読解の問題において問う資質・能力の内容も含めて引き続き検討をお願いしたい。

以上の試験内容を踏まえると、今後、受験者は歴史的事項に関する知識・理解の習得にとどまるのではなく、史資料の性格を踏まえた上で、そこから情報を読み取る能力、得られた情報をもとに知識などを活用しながら論理的に思考・判断・表現する能力を養うようなトレーニングを経験して行くことが前提となってくる。一方で、現在の高等学校の現場では、旧来の知識偏重から脱却し、思考力、判断力、表現力等の育成を基軸とした授業と評価のあり方が模索されている。今年度の共通テストは、このような現在の高等学校での学習活動で育成がめざされている資質・能力と、大学への入り口となる試験で問う資質・能力との整合の方向性が具体的に示されたものと評価したい。